九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 五島列島・下崎山町方言の動詞の音便現象について

有元，光彦

https://doi.org/10.15017/2332578

出版情報：文學研究. 88, pp.181-204, 1991-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

# 五島列島・下崎山町方言の動詞の音便現象について

有　元　光　彦

## 1．はじめに

本稿の目的は，五島列島福江島下崎山町（長崎県福江市）で話されている方言の動詞活用形の一つである完了形（タ形）をデータとし，そこに現れている音便現象について，音声的・音韻的な考察をすることにある[1]。

下崎山町方言の，いわゆる「音便」には，音韻的な術語を用いれば，促音便・撥音便・イ音便・ウ音便の4種類がある。これらについての詳細な記述は以下の各章に譲るが，本稿では，これらの音便現象が，語幹末子音の違いに加えて，その直前の母音の違いや語幹の音節数に関わることにも言及する。

音声表記は，簡略表記を採っている。基底形を記号／／で，音声形を記号［　］で括って示すが，文脈上明かな箇所では省略する。〈　〉内には大体の意味を記す。また，音声形の左側に付けた各種の記号には，次のような意味がある。まず，記号＊は，その音声形が不適格であることを表す。記号？は，その音声形が少々奇妙であるとインフォーマントが感じている形，記号＆は，聞いたことがある形であることをそれぞれ表す。また，未調査項目は空欄にしてある。

## 2．動詞語幹について

動詞は，その語幹の形から，大きく以下の三種類に分類できる[2]。

(1) a. 子音語幹動詞　　例：kaw-〈買う〉，tor-〈取る〉
（語幹末子音は w, r, t, s, k, g, n, m の 9 つ）　　kat-〈勝つ〉，kas-〈貸す〉
kak-〈書く〉，kog-〈扱く〉
tob-〈飛ぶ〉，sin-〈死ぬ〉
yom-〈読む〉

b. 母音語幹動詞　　例：de-〈出る〉，uke-〈受ける〉
（語幹末母音は e, i の 2 つ）　　mi-〈見る〉，oki-〈起きる〉

c. 強変化動詞（3 語のみ）　　ik-～it-〈行く〉
ko-～ki-～ku-〈来る〉
su-～se-～s-〈する〉

本稿で対象とするのは，子音語幹動詞だけである。

## 3．データ及び考察

### 3.1.　w語幹動詞

まず，語幹末子音が/w/である動詞の完了形を取り上げる。以下に，その例を挙げる。

(2)

| 語幹 | 二重子音形 | 長母音形 | 短母音形 |
|---|---|---|---|
| /kaw-/〈買う〉 | katta | *ka:ta | *kata |
| | *kotta | ko:ta | kota |
| /yataw-/〈雇う〉 | yatatta | *yata:ta | *yatata |
| | yatotta | yato:ta | yatota |
| /tigaw-/〈違う〉 | tʃigatta | *tʃiga:ta | *tʃigata |
| | *tʃigotta | tʃigo:ta | tʃigota |

| | | | |
|---|---|---|---|
| /haw-/〈這う〉 | hatta | *ha:ta | *hata |
| | *hotta | ho:ta | hota |
| /aw-/〈会う〉 | atta | *a:ta | *ata |
| | *otta | o:ta | ota |
| /waraw-/〈笑う〉 | waratta | *wara:ta | *warata |
| | *warotta | waro:ta | warota |
| /utagaw-/〈疑う〉 | utagatta | *utaga:ta | *utagata |
| | *utagotta | utago:ta | utagota |
| /utaw-/〈歌う〉 | utatta | *uta:ta | *utata |
| | *utotta | uto:ta | utota |
| /araw-/〈洗う〉 | aratta | *ara:ta | *arata |
| | arotta | aro:ta | arota |
| /sumaw-/〈住む〉 | *sumatta | *suma:ta | *sumata |
| | *sumotta | sumo:ta | sumota |
| | | | |
| /yuw-/〈言う〉 | yutta | yu:ta | yuta |
| /suw-/〈吸う〉 | sutta | su:ta | *suta |
| /kuw-/〈食べる〉 | kutta | ku:ta | kuta |
| /nuw-/〈縫う〉 | nutta | nu:ta | *nuta |
| /nuguw-/〈拭う〉 | nugutta | nugu:ta | nuguta |
| | | | |
| /yow-/〈酔う〉 | yotta | yo:ta | yota |
| /mayow-/〈迷う〉 | mayotta | mayo:ta | mayota |
| /omow-/〈思う〉 | omotta | omo:ta | omota |

以上から分かるように，w語幹動詞の完了形としては，三つの形が現れている。即ち，音声的に言って，音便を起こしている部分には二重子音・長母音・

短母音が現れている。以下，二重子音が現れる（促音便）形を「二重子音形」，長母音が現れる（ウ音便）形を「長母音形」，そして短母音が現れる形を「短母音形」と便宜上呼ぶことにする。この三つの音便形の内，二重子音形（促音便）は，インフォーマントが共通語的であると意識している。従って，長母音形・短母音形が方言形である。2つの方言形の内では，短母音形が古い形であるようである。本稿では，共通語的な形はデータを挙げる範囲に止めるため，分析は方言形，つまりw語幹動詞の完了形では，短母音形についてのみ行う。

短母音形と語幹の音節数との間には，語幹末が /uw-/ である動詞において，次のような関係がある。

(3) 語幹末が /uw-/ である動詞においては，その語幹が一音節である場合，短母音形が不適格となる。

但し，[yuta]〈言った〉，[kuta]〈食べた〉は適格となっている。

また，語幹末が /aw-/ である動詞においては，その語幹の音節数が一音節である場合，短母音形が不適格になるインフォーマントがいる[3]。例えば，＊[kota]〈買った〉，＊[hota]〈這った〉，＊[ota]〈会った〉である。但し，[nota]〈綯った〉だけは，M氏も適格であると判断している。語幹末が /aw-/ 以外の動詞については，M氏の場合未調査であるので，語幹の音節数と短母音形との間に，同様の関係があるかどうかは分からない。また，M氏からは，/waraw-/〈笑う〉に [waruta]〈笑った〉という形も得られており，[warota] よりも良く使うとのことである。

短母音形では，語幹末が /aw-/ である場合，それが[o]として現れている。従って，次のような規則が適用されているものと考えられる。

(4) 語幹末子音が /w/ である動詞語幹に，/t/ で始まる接辞が続くとき，語幹末子音の直前の母音 /a/ は[o]として現れる。

語幹末子音の直前の母音が[a]のままで現れる形は不適格であるので（例えば，＊[kata]〈買った〉など），(4)は義務的に適用される（obligatory application）ものと考えられる[4]。

### 3.2. b語幹動詞

次に，語幹末子音が /b/ である動詞の完了形を取り上げる。以下に，その例を挙げる。

| (5) 語幹 | 鼻子音形 | 長母音形 | 短母音形 | 二重子音形 |
|---|---|---|---|---|
| /orab-/〈叫ぶ〉 | oranda | *ora:da | &orada | &oradda |
| | &oronda | *oro:da | oroda | &orodda |
| /yerab-/〈選ぶ〉 | yeranda | *yera:da | yerada | *yeradda |
| | *yeronda | *yero:da | yeroda | *yerodda |
| /narab-/〈並ぶ〉 | naranda | *nara:da | ?narada | *naradda |
| | *naronda | *naro:da | naroda | *narodda |
| /musub-/〈結ぶ〉 | musunda | *musu:da | musuda | *musudda |
| /asob-/〈遊ぶ〉 | asonda | *aso:da | &asoda | *asodda |
| | asunda | *asu:da | &asuda | *asudda |
| /tob-/〈飛ぶ〉 | tonda | *to:da | *toda | *todda |
| /yob-/〈呼ぶ〉 | yonda | yo:da | yoda | *yodda |
| /korob-/〈転ぶ〉 | koronda | *koro:da | koroda | *korodda |
| /hokorob-/〈綻ぶ〉 | hokoronda | *hokoro:da | *hokoroda | *hokorodda |
| /hakob-/〈運ぶ〉 | hakonda | ?hako:da | hakoda | *hakodda |
| /yorokob-/〈喜ぶ〉 | yorokonda | ?yoroko:da | yorokoda | *yorokodda |

(5)から分かるように，b語幹動詞の完了形としては，二つの形が適格な形として現れている。即ち，短母音形・鼻子音形である（語幹末子音が[n]として現れる形を「鼻子音形」と呼ぶことにする)。言うまでもなく，前者が方言形であり，後者が共通語的であるとインフォーマントが意識しているものである。

短母音形の内，？[narada]〈並んだ〉は，インフォーマントが奇妙に感じる形である。＊[toda]〈飛んだ〉は不適格な形であるが，理由は現在の所分からない。[yoda]〈呼んだ〉は適格であることから，語幹が一音節のときに不適格になる訳ではない。また，＊[hokoroda]〈綻んだ〉も不適格である。これは，方言形として，他に[hokoreta]〈綻んだ〉（語幹基底形は /hokore-/）という形があるためである。

次に，短母音形と語幹の音節数との間に，(3)と同様の関係があるかどうかという問題であるが，これについては不明である。(5)で /musub-/〈結ぶ〉という二音節語幹の動詞しか挙げていないのも，語幹が一音節である方言形の動詞があるかどうかが不明であるからである。

さて，語幹末が /ab-/ である動詞では，語幹末子音の直前の母音 /a/ が[o]として現れる短母音形がある。ここには，次のような規則が適用されている。

(6) 語幹末子音が /b/ である動詞語幹に，/t/ で始まる接辞が続くとき，語幹末子音の直前の母音 /a/ は[o]として現れる。

語幹末子音の直前の母音が[a]のままで現れる形もあるので，(6)は随意的に適用される規則（optional rule）である。この点で，w語幹動詞とは異なっている。

### 3.3. m語幹動詞

次に，語幹末子音が /m/ である動詞の完了形を取り上げる。(7)に，その例を挙げる。

| (7) 語幹 | 鼻子音形 | 長母音形 | 短母音形 | 二重子音形 |
|---|---|---|---|---|
| /am-/〈編む〉 | anda | ＊a:da | ada<br>oda | ＊adda |
| /ogam-/〈拝む〉 | oganda | ＊oga:da | ogada<br>ogoda | ＊ogadda |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| /kam-/〈噛む〉 | kanda | *ka:da | *kada<br>koda | *kadda |
| /tukam-/〈摑む〉 | tsukanda | *tsuka:da | tsukada<br>tsukoda | *tsukadda |
| /niram-/〈睨む〉 | niranda | *nira:da | nirada<br>neroda | *niradda |
| /nidim-/〈滲む〉 | nidʒinda | *nidʒi:da | nidʒida | &nidʒidda |
| /kanasim-/〈悲しむ〉 | kanasinda | *kanasi:da | *kanasida | *kanasidda |
| /kurusim-/〈苦しむ〉 | kurusinda | *kurusi:da | *kurusida | *kurusidda |
| /um-/〈産む〉 | unda | *u:da | *uda | *udda |
| /nusum-/〈盗む〉 | nusunda | *nusu:da | nusuda | *nusudda |
| /kum-/〈汲む〉 | kunda | *ku:da | *kuda | *kudda |
| /sidum-/〈沈む〉 | sidzunda | *sidzu:da | sidzuda | *sidzudda |
| /yasum-/〈休む〉 | yasunda | *yasu:da | yasuda | *yasudda |
| /hum-/〈踏む〉 | ɸunda | *ɸu:da | *ɸuda | *ɸudda |
| /ayum-/〈歩く〉 | ayunda | ?ayu:da | ayuda | *ayudda |
| /hohoem-/〈微笑む〉 | hohoenda | *hohoe:da | *hohoeda | *hohoedda |
| /yom-/〈読む〉 | yonda | yo:da | yoda | *yodda |
| /nekom-/〈寝込む〉 | nekonda | *neko:da | nekoda | *nekodda |
| /nom-/〈飲む〉 | nonda | *no:da | noda | *nodda |
| /tanom-/〈頼む〉 | tanonda | ?tano:da | tanoda | *tanodda |

(7)から分かるように，m語幹動詞の完了形としては，鼻子音形と短母音形が

現れている。前者が共通語的な形であり，後者が方言形である。但し，短母音形では，若干の例外がある。まず，＊[kada]〈噛んだ〉が不適格となっている。また，＊[kanasida]〈悲しんだ〉，＊[kurusida]〈苦しんだ〉も不適格となっているが，これらは〈悲しむ〉〈苦しむ〉自体が共通語的な語彙であるとインフォーマントが意識しているため，不適格になっているものと考えられる。[hohoenda]〈微笑んだ〉も，共通語的な形である。

一方，長母音形は大部分が不適格であるが，[yo:da]〈読んだ〉だけは適格となっている。また，(7)には挙げていないが，/um-/〈産む〉には[n:da]〈産んだ〉という形も現れている。この形の方が，方言形であると思われる。

短母音形と語幹の音節数との間には，次のような関係がある。

(8) 語幹末が /um-/ である動詞においては，その語幹が一音節である場合，短母音形が不適格となる。

これは，w語幹動詞の場合（(3)を参照）と同じような制約である。

また，語幹末が /am-/ である動詞では，語幹末子音の直前の母音 /a/ が[o]として現れる短母音形もある。これを派生するためには，次のような規則が必要となる。

(9) 語幹末子音が /m/ である動詞語幹に，/t/ で始まる接辞が続くとき，語幹末子音の直前の母音 /a/ は[o]として現れる。

語幹末子音の直前の母音が[a]で現れることもある（＊[kada]〈噛んだ〉が不適格であることは前述した）ので，(9)は随意規則である。この点で，w語幹動詞とは異なっている。

### 3.4. w, b, m 語幹動詞のまとめ

以上3．1～3．3まで，w，b，m 語幹動詞の完了形を見てきた。それぞれ若干の例外が現れているが，これらについては前記各章に譲るとして，本章では，以上のまとめを行う。

(10) a．w，b，m 語幹動詞の完了形（方言形）としては，短母音形が共

通して現れている。また，w語幹動詞では，長母音形も現れている。

b．語幹末子音の直前の母音が[o]として現れる短母音形を派生するためには，次のような規則が必要となる[5]。

「語幹末子音が /w, b, m/ である動詞語幹に，/t/ で始まる接辞が続くとき，語幹末子音の直前の母音 /a/ は[o]となる。」

この規則は，w語幹動詞では義務的に適用され，b，m語幹動詞では随意的に適用される規則である。また，/w, b, m/ は両唇音 (bilabial) としてまとめられる。

c．短母音形と語幹の音節数との関係は，次のようである。即ち，語幹末子音が両唇音 (bilabial) で，その直前の母音が /u/ である動詞において，その語幹が一音節である場合，短母音形は不適格となる。

### 3.5. s語幹動詞

次に，語幹末子音が /s/ である動詞の完了形を取り上げる。以下に，その例を示す。

| (11) 語幹 | シ音形 | 長母音形 | 短母音形 |
|---|---|---|---|
| /kas-/〈貸す〉 | kasita | *ka:ta | kata |
| /hanas-/〈話す〉 | hanasita | *hana:ta | hanata |
| /sagas-/〈捜す〉 | sagasita | *saga:ta | sagata |
| /sas-/〈刺す〉 | sasita | *sa:ta | sata |
| /tukisas-/〈突き刺す〉 | tsukisasita | *tsukisa:ta | tsukisata |
| /das-/〈出す〉 | dasita | *da:ta | data |
| /omoidas-/〈思い出す〉 | omoidasita | ?omeda:ta | omedata |
| /kogas-/〈焦がす〉 | kogasita | *koga:ta | kogata |

| | | | |
|---|---|---|---|
| /amayakas-/〈甘やかす〉 | amayakasita | *amayaka:ta | amayakata |
| /tirakas-/〈散らかす〉 | tʃirakasita | *tʃiraka:ta | tʃirakata |
| /hukurakas-/〈膨らます〉 | ɸukurakasita | | ɸukurakata |
| /nuras-/〈濡らす〉 | nurasita | *nura:ta | nurata |
| /kowas-/〈壊す〉 | kowasita | *kowa:ta | kowata |
| /uttaarakas-/〈倒す〉 | utta:rakasita | | utta:rakata |
| /uttyakas-/〈落とす〉 | uttʃakasita | | uttʃakata |
| /hokorakas-/〈綻ばす〉 | hokorakasita | | hokorakata |
| | | | |
| /yurus-/〈許す〉 | yurusita | *yuru:ta | yuruta |
| /kakus-/〈隠す〉 | kakusita | *kaku:ta | kakuta |
| /mus-/〈蒸す〉 | musita | *mu:ta | ?muta |
| /kudus-/〈崩す〉 | kudzusita | | kudzuta |
| /hadus-/〈外す〉 | hadzusita | *hadzu:ta | hadzuta |
| /utus-/〈写す〉 | utsusita | *utsu:ta | utsuta |
| /turus-/〈吊す〉 | tsurusita | *tsuru:ta | *tsuruta |
| | | | |
| /kes-/〈消す〉 | kesita | *ke:ta | keta |
| /kaes-/〈返す〉 | kaesita | *kae:ta | *kaeta |
| /hikkaes-/〈引き返す〉 | çikkaesita | *çikkae:ta | çikkaeta |
| /tames-/〈試す〉 | tamesita | *tame:ta | *tameta |
| | | | |
| /os-/〈押す〉 | osita | *o:ta | ota |
| | | *ye:ta | (y)eta |
| /koros-/〈殺す〉 | korosita | *koro:ta | korota |
| | | *kore:ta | koreta |
| /taos-/〈倒す〉 | taosita | *tao:ta | taota |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | *tae:ta | *taeta |
| /toos-/〈通す〉 | to:sita | *too:ta | to:ta |
| | | *toe:ta | toeta |
| /naos-/〈直す〉 | naosita | *nao:ta | naota |
| | | *nae:ta | *naeta |
| /okos-/〈起こす〉 | okosita | *oko:ta | okota |
| | | *oke:ta | oketa |
| /sugos-/〈過ごす〉 | sugosita | sugo:ta | sugota |
| | | *suge:ta | *sugeta |
| /yogos-/〈汚す〉 | yogosita | *yogo:ta | yogota |
| | | *yoge:ta | yogeta |
| /otos-/〈落とす〉 | otosita | *oto:ta | otota |
| | | *ote:ta | oteta |
| /modos-/〈戻す〉 | modosita | | modota |
| | | | modeta |
| /hos-/〈干す〉 | hosita | ? ho:ta | hota |
| | | *he:ta | heta |

以上から分かるように，s 語幹動詞の完了形には，語幹末子音 /s/ が[si]として現れるもの（以後，「シ音形」と呼ぶ）と，短母音形とがある。前者が共通語的な形であり，後者が方言形である。但し，*[kaeta]〈返した〉，*[tameta]〈試した〉は不適格となっている。後者が不適格となっているのは，〈試す〉自体が共通語的な語彙であるからであろう。

次に，s 語幹動詞でも，短母音形と語幹の音節数との間に関係がありそうである。即ち，語幹末が /us-/ である動詞において，語幹が一音節である場合，短母音形は不適格となるようであるが，例としては？[muta]〈蒸した〉しか

ないので，この制約を証明する根拠にはならない。また，＊[tsuruta]〈吊るした〉は，その語幹が二音節であるにも拘わらず，不適格となっているが，これは，その代わりに，[tsutta]〈吊った〉（語幹基底形は /tur-/）の方を使うからである。

語幹末が /os-/ である動詞の短母音形には，/os/ が[e]として現れる形も出てきている。ここには，次のような規則が適用されていると考えられる。

(12) 語幹末子音が /s/ である動詞語幹に，/t/ で始まる接辞が続くとき，語幹末子音の直前の母音 /o/ は[e]として現れる。

この場合，語幹末子音の直前の母音が[o]のままで現れている形もあるので，(12)は随意規則である。但し，＊[taeta]〈倒した〉，＊[naeta]〈直した〉，＊[sugeta]〈過ごした〉は，(12)の例外である。また，別のインフォーマント，M氏では，語幹末が /os-/ である動詞において，＊[ota]〈押した〉，＊[taota]〈倒した〉，＊[naota]〈直した〉，＊[hota]〈干した〉は不適格となる。

### 3.6. k 語幹動詞

ここでは，語幹末子音が /k/ である動詞の完了形を取り上げる。以下に，例を挙げる。

(13)

| 語幹 | イ音形 | 長母音形 | 短母音形 |
|---|---|---|---|
| /kak-/〈書く〉 | kaita | ＊ka:ta | kata |
| /migak-/〈磨く〉 | migaita | ＊miga:ta | migata |
| /sak-/〈咲く〉 | saita | ? sa:ta | sata |
| /tak-/〈炊く〉 | taita | ? ta:ta | tata |
| /tatak-/〈叩く〉 | tataita | ? tata:ta | tatata |
| /hak-/〈掃く〉 | haita | ha:ta | hata |
| /mak-/〈蒔く〉 | maita | ma:ta | mata |
| /wak-/〈挽く〉 | waita | | ＊wata |

| | | | |
|---|---|---|---|
| /kik-/〈聞く〉 | kiːta | ---------- | *kita |
| /kudik-/〈挫く〉 | kudʒiːta | ---------- | kudʒita |
| /hik-/〈弾く〉 | çiːta | ---------- | *çita |
| /hinnik-/〈脱ぐ〉 | çinniːta | ---------- | çinnita |
| | çinnuita | | çinnuta |
| /titik-/〈咳く〉 | tʃitʃiːta | ---------- | tʃitʃita |
| /hadik-/〈弾く〉 | hadʒiːta | ---------- | hadʒita |
| /sik-/〈敷く〉 | siːta | ---------- | sita |
| | | | |
| /muk-/〈剝く〉 | muita | *muːta | &muta |
| /uk-/〈浮く〉 | uita | *uːta | *uta |
| /unaduk-/〈頷く〉 | unadzuita | ?unadzuːta | unadzuta |
| /tuk-/〈着く〉 | tsuita | tsuːta | ?tsuta |
| /tuduk-/〈続く〉 | tsudzuita | tsudzuːta | tsudzuta |
| /kantuk-/〈噛みつく〉 | kantsuita | *kantsuːta | kantsuta |
| /nuk-/〈抜く〉 | nuita | ?nuːta | *nuta |
| /huk-/〈吹く〉 | ɸuita | ɸuːta | *ɸuta |
| /aruk-/〈歩く〉 | aruita | *aruːta | aruta |
| /tutuk-/〈つつく〉 | tsutsuita | *tsutsuːta | tsutsuta |
| /tuk-/〈突く〉 | tsuita | | *tsuta |
| /otituk-/〈落ち着く〉 | otʃitsuita | | otʃitsuta |
| /natuk-/〈懐く〉 | natsuita | | natsuta |
| /tikaduk-/〈近づく〉 | tʃikadzuita | | tʃikadzuta |
| /uduk-/〈疼く〉 | udzuita | | udzuta |
| /tumaduk-/〈躓く〉 | tsumadzuita | | tsumadzuta |
| /saruk-/〈歩き回る〉 | saruita | | saruta |

| | | | |
|---|---|---|---|
| /sek-/〈咳く〉 | se:ta | ---------- | *seta |
| /umek-/〈呻く〉 | ume:ta | ---------- | umeta |
| /ok-/〈置く〉 | oita | o:ta | ota |
| | | ? ye:ta | yeta |
| /ugok-/〈動く〉 | ugoita | ugo:ta | ugota |
| | | *uge:ta | *ugeta |
| /nozok-/〈覗く〉 | nodzoita | nodzo:ta | nodzota |
| | | *nodze:ta | nodzeta |
| /hotok-/〈解く〉 | hotoita | ? hoto:ta | hotota |
| | | ? hote:ta | hoteta |

(13)から分かるように，k 語幹動詞の完了形には，語幹末子音 /k/ が[i]として現れるもの（以後，この形を「イ音形」と呼ぶ）と短母音形とがある。前者が共通語的な形であり，後者が方言形である。短母音形では，*[kita]〈聞いた〉，*[çita]〈弾いた〉，*[seta]〈咳いた〉など不適格であるものもある。もっとも，[se:ta]〈咳いた〉自体が共通語的な形であり，方言形としては，[tʃitʃita]〈咳いた〉（語幹基底形は /titik-/）が使われる。長母音形は，普通不適格であるが，[ha:ta]〈掃いた〉，[ma:ta]〈蒔いた〉，[tsu:ta]〈着いた〉，[ɸu:ta]〈吹いた〉は適格である。また，語幹末が /ok-/ である動詞では，[o:ta]〈置いた〉，[ugo:ta]〈動いた〉，[nodzo:ta]〈覗いた〉のように，長母音形が体系的に適格である可能性もある。

また，[se:ta]〈咳いた〉，[ume:ta]〈呻いた〉をイ音形の欄に入れているが，これは次のような規則が義務的に適用されているものと考えているからである。

(14) ei → ee

(13)には挙げていないが，[ume:ta]〈呻いた〉には，[m:meta]という形も現れて

いる。こちらの方が，もともとの方言形であると思われる。

短母音形と語幹の音節数との間には，次のような関係が見られる。

(15) 語幹末が /uk-/ である動詞において，語幹が一音節の場合，短母音形は不適格となる。

＆[muta]〈剝いた〉などは不適格とまでは言えないが，おおよそ(15)の射程距離内である。

次に，語幹末が /ok-/ である動詞の短母音形には，/ok/ が[e]として現れる形もある。

(16) 語幹末子音が /k/ である動詞に，/t/ で始まる接辞が続くとき，語幹末子音の直前の母音 /o/ は[e]として現れる。

この /o/ は[o]のままで現れることもあるから，(16)は随意規則である。但し，＊[ugeta]〈動いた〉は不適格である。

### 3.7. g 語幹動詞

次に，語幹末子音が /g/ である動詞の完了形を見てみる。以下に，その例を挙げる。

| (17) 語幹 | イ音形 | 長母音形 | 短母音形 | 二重子音形 | 鼻子音形 |
|---|---|---|---|---|---|
| /hag-/〈剝ぐ〉 | haida | ＆ha:da | hada | ＊hadda | ＊handa |
| /kag-/〈嗅ぐ〉 | kaida | ＊ka:da | kada | ＊kadda | ＊kanda |
| /tunag-/〈繋ぐ〉 | tsunaida | ＊tsuna:da | tsunada | ＊tsunadda | tsunanda |
| /susug-/〈濯ぐ〉 | susuida | ＊susu:da | susuda | ＊susudda | susunda |
| /yusug-/〈濯ぐ〉 | yusuida | ？yusu:da | yusuda | ＊yusudda | yusunda |
| /tug-/〈注ぐ〉 | tsuida | ＊tsu:da | tsuda | ＊tsudda | ＊tsunda |
| /yurug-/〈揺ぐ〉 | yuruida | | yuruda | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| /kaseg-/〈稼ぐ〉 | kase:da | ---------- | kaseda | kasedda | kasenda |
| /huseg-/〈防ぐ〉 | ɸuse:da | ---------- | ɸuseda | ＊ɸusedda | ＊ɸusenda |
| | | | | | |
| /aog-/〈扇ぐ〉 | aoida | ao:da | aoda | ＊aodda | aonda |
| | | ae:da | aeda | | aenda |
| /kog-/〈扱く〉 | koida | &ko:da | koda | ＊kodda | ?konda |
| | | ?ke:da | keda | | ?kenda |
| /isog-/〈急ぐ〉 | isoida | ＊iso:da | isoda | ＊isodda | isonda |
| | | ＊ise:da | iseda | | isenda |
| /tog-/〈研ぐ〉 | toida | to:da | toda | ＊todda | ＊tonda |
| | | ?te:da | teda | | ＊tenda |
| /oyog-/〈泳ぐ〉 | oyoida | ＊oyo:da | oyoda | ＊oyodda | oyonda |
| | | ?oye:da | oyeda | | oyenda |

(17)から分かるように，g語幹動詞の完了形には，イ音形・短母音形・鼻子音形が現れている。長母音形は大部分が不適格になっているが，[ao:da]〈扇いだ〉，[to:da]〈研いだ〉，[kase:da]〈稼いだ〉，[ɸuse:da]〈防いだ〉は適格となっている。〈稼いだ〉では，[kasedda]という形も適格となっている。〈稼ぐ〉も〈防ぐ〉も共通語的な語彙である。[kase:da]，[ɸuse:da]をイ音形の欄に入れたのは，規則(14)が適用されているからである。

また，短母音形と語幹の音節数との間には，(15)と同じような関係は見られない。語幹が一音節である /tug-/〈注ぐ〉の短母音形[tsuda]は，適格となっている。注意すべき点は，次のような，鼻子音形と語幹の音節数との関係である。

(18) g語幹動詞において，その語幹が一音節である場合，鼻子音形は不適格となる。

(18)の関係は，(15)などとは違い，語幹末子音の直前の母音が，その条件に絡んで

くることはない。従って，全てのｇ語幹動詞に通じる制約である。

語幹末が /og-/ である動詞の短母音形及び鼻子音形には，/og/ がそれぞれ [e]，[en] として現れる形もある。ここでは，次のような規則が適用されているものと考えられる。

(19) 語幹末子音が /g/ である動詞語幹に，/t/ で始まる接辞が続くとき，語幹末子音の直前の母音 /o/ は [e] として現れる。

語幹末子音の直前の母音が [o] のままで現れている形もあることから，(19)は随意規則である。

### 3.8. s, k, g 語幹動詞のまとめ

以上３．５～３．７では，s, k, g 語幹動詞の完了形を見てきた。以下に，明らかになった点をまとめてみる。

(20) a．s, k, g 語幹動詞の完了形（方言形）としては，短母音形が共通して現れている。また，ｇ語幹動詞では，鼻子音形も現れている。

b．語幹末子音の直前の母音が [e] として現れる短母音形を派生するためには，次のような規則が必要となる[6]。

「語幹末子音が /s, k, g/ である動詞語幹に，/t/ で始まる接辞が続くとき，語幹末子音の直前の母音 /o/は [e] となる。」

これは随意規則である。

c．短母音形と語幹の音節数との関係は，次のようである。即ち，語幹末子音が /s, k/ で，その直前の母音が /u/ である動詞において，その語幹が一音節である場合，短母音形は不適格となる（但し，ｓ語幹動詞に関しては，問題が残る）。

d．ｇ語幹動詞では，その語幹が一音節である場合，語幹末子音の直前の母音に関係なく，鼻子音形は不適格になる。

## 3.9. r, t, n語幹動詞

本章では，語幹末子音が /r, t, n/ である動詞の完了形をまとめて取り上げる。

(21) r 語幹動詞

| 語幹 | 二重子音形 | 短母音形 | 長母音形 |
|---|---|---|---|
| /suwar-/〈座る〉 | suwatta | *suwata | *suwa:ta |
| /atumar-/〈集まる〉 | atsumatta | *atsumata | *atsuma:ta |
| /war-/〈割る〉 | watta | *wata | *wa:ta |
| /nar-/〈鳴る〉 | natta | *nata | *na:ta |
| /korogar-/〈転がる〉 | korogatta | *korogata | *koroga:ta |
| /tattyagar-/〈立つ〉 | tattʃagatta | *tattʃagata | *tattʃaga:ta |
| /tamagar-/〈驚く〉 | tamagatta | | |
| | | | |
| /hair-/〈入る〉 | haitta | *haita | *hai:ta |
| /kir-/〈切る〉 | kitta | *kita | *ki:ta |
| /kair-/〈帰る〉 | kaitta | *kaita | *kai:ta |
| /kakkudir-/〈引っ掻く〉 | kakkudʒitta | | |
| /kagir-/〈限る〉 | kagitta | *kagita | *kagi:ta |
| | | | |
| /hur-/〈降る〉 | ɸutta | *ɸuta | *ɸu:ta |
| /tur-/〈釣る〉 | tsutta | *tsuta | *tsu:ta |
| /nagur-/〈殴る〉 | nagutta | *naguta | *nagu:ta |
| /gotyogur-/〈擽る〉 | gotʃogutta | *gotʃoguta | *gotʃogu:ta |
| | | | |
| /suber-/〈滑る〉 | subetta | *subeta | *sube:ta |
| /her-/〈放る〉 | hetta | *heta | *he:ta |

| | | | |
|---|---|---|---|
| /ter-/〈照る〉 | tetta | *teta | *te:ta |
| /modor-/〈戻る〉 | modotta | *modota | *modo:ta |
| /tor-/〈取る〉 | totta | *tota | *to:ta |
| /nor-/〈乗る〉 | notta | *nota | *no:ta |
| /odor-/〈踊る〉 | odotta | *odota | *odo:ta |
| /naor-/〈治る〉 | naotta | *naota | *nao:ta |

(22) t 語幹動詞

| 語幹 | 二重子音形 | 短母音形 | 長母音形 |
|---|---|---|---|
| /mat-/〈待つ〉 | matta | *mata | *ma:ta |
| /kat-/〈勝つ〉 | katta | *kata | *ka:ta |
| /sodat-/〈育つ〉 | sodatta | *sodata | *soda:ta |
| /ut-/〈打つ〉 | utta | *uta | *u:ta |
| /ut-/〈耕す〉 | utta | | |
| /mot-/〈持つ〉 | motta | *mota | *mo:ta |
| /torimot-/〈取り持つ〉 | torimotta | *torimota | *torimo:ta |

(23) n 語幹動詞

| 語幹 | 鼻子音形 | 長母音形 | 短母音形 | 二重子音形 |
|---|---|---|---|---|
| /sin-/〈死ぬ〉 | sinda | *si:da | *sida | *sidda |

以上から分かるように，r，t 語幹動詞では，二重子音形しか適格でない。また，n 語幹動詞では鼻子音形だけが適格である。これらは，形の上では東京方言と同じであるが，それらが当方言の方言形である。

## 4. 音便現象のまとめ

以上，動詞の完了形のデータを挙げ，その内方言形のみを取り上げてきたが，ここで，下崎山町方言に特有と思われる現象について，簡単にまとめておくことにする。

(24) a．w, b, m，s，k，g 語幹動詞では，短母音形が共通して現れている。また，w語幹動詞では，長母音形も現れている。g 語幹動詞では，鼻子音形も現れている。

b．w, b, m 語幹動詞では，語幹末子音の直前の母音が /a/ であるとき，それが[o]として現れることもある（勿論，[a]として現れる形もあるが，w語幹動詞では，この形は不適格である)。この意味で，w, b, m語幹動詞は，音便現象上，同じ振る舞いをすると言える。

c．s, k, g語幹動詞では，語幹末子音の直前の母音が /o/ であるとき，それが[e]として現れることもある（勿論，[o]として現れる形もある)。この意味で，s, k, g 語幹動詞は，音便現象上，同じ振る舞いをすると言える。

d．短母音形と語幹の音節数との関係は，次のようである。まず，語幹末子音が /w, b, m/（両唇音）または /s, k/ で，その直前の母音が /u/ である動詞において，その語幹が一音節である場合，短母音形は不適格となる。

e．語幹末子音が /g/ である動詞（g 語幹動詞）では，その語幹が一音節である場合，語幹末子音の直前の母音に関係なく，鼻子音形は不適格となる。

勿論，個々の動詞については例外もあるが，これらは前述した各章を参照されたい。

## 5. おわりに

本稿では，五島列島・下崎山町方言の動詞の完了形をデータとし，そこに現れている音便現象について記述した。その結果，音便現象の上では，w, b, m 語幹動詞が一つのグループを成し，s, k, g 語幹動詞がまた別の一つのグループを成すことが分かった。ここで，残りの r, t, n 語幹動詞が一つのグループを成すことになれば，9 種類の子音語幹動詞を，音便現象の上から，3 つのグループに分けることが出来るのであるが，r, t, n 語幹動詞が，音便上，同じ振る舞いをするという根拠は今の所得られていない[7]。また，ある音便形が，語幹の音節数と密接な関係があるということも明らかになった。

当方言では，

(a)語幹の音節数が一音節であるかどうか

(b)語幹末子音が何であるか

(c)語幹末子音の直前の母音が何であるか

ということが，音便上，重要なことである。

本稿では，具体的なデータの記述に中心を置き，理論的な説明はしなかった。それは，注6)で述べたような語幹内の母音交替現象が明らかになっていないからでもある。理論的な枠組みは，それだけでも様々な問題を含んでいる。今後，総合的な記述が必要になることは，言うまでもない。

### 注

＊インフォーマントの方々，及びコメントを下さった方々に感謝します。

1) 本稿で挙げるデータは，1989年 7 月24日・11月13～15日の臨地調査において得られたもの，及び1989年 9 月 6 日・10月 5 日・10月17日の電話調査によって，再確認したものである。インフォーマントは，白浜キヨ子氏（昭和 4 （1929）年生，女）である。

2) 動詞語幹の基底形の設定に関しては，有元（1988：7-65）を参照されたい。また，基底形における記号—は，形態素境界を表す。末端の境界記号は省略する。

3) 宮前清氏（明治39（1906）年生，男，故人）。以後，M氏とする。

4) 注5)に示したような事実から考えると，長母音形は，短母音形とは異なる派生過程を辿るようである。即ち，長母音形を派生するためには，次のような，語幹末子音とその直前の母音との融合規則が必要となる。

$$\left\{\begin{matrix} a \\ \\ o \end{matrix}\right\} w \rightarrow oo$$

$$uw \rightarrow uu$$

この規則は，＊[ka:ta]〈買った〉などが不適格であることから，義務的に適用されるものであると考えられる。そもそも短母音形と長母音形とは，同じ方言形であっても，インフォーマントの中で意識が違うのではないかと思われる。勿論，短母音形の方が古い形であることは前述した。それ以外にも，長母音形には地域共通語的な意識があるようである。塚本（1978）によれば，長崎市方言のw語幹動詞の完了形には，[ko:ta]〈買った〉などのように，長母音形が挙げられている。以上のような意味で，長母音形は，短母音形とは異なる規則の適用を受ける（異なる派生過程を辿る）と考えた方が良いように思われる。

5) この規則は(4)(6)(9)をまとめたものであるが，これを，語幹末子音 /w, b, m/ とその直前の母音 /a/ との融合規則である，とすることは出来ない。なぜなら，完了形やテ形以外の活用形においても，/a/ が [o] として現れることがあるからである。例えば，/orab-/〈叫ぶ〉の終止・連体形は [oraN], [oroN]〈叫ぶ〉（基底形は /orab-ʔ/），否定形は [orabaN], [orobaN]〈叫ばない〉（基底形は /orab-aN/）というように，語幹末子音 /b/ がその直前の母音 /a/ と融合したとは考えられない（有元（1990b）を参照のこと）。

6) この規則は(12)(16)(19)をまとめたものである。注5)で述べたことと同様に，テ形と完了形以外の活用形においても，語幹末子音 /s, k, g/ の直前の母音 /o/ が [e] として現れることがある。例えば，/hotok-/〈解く〉の終止・連体形では [hotoʔ], [hoteʔ]〈解く〉（基底形は /hotok-ʔ/），否定形では [hotokaN], [hotekaN]〈解かない〉（基底形は /hotok-aN/）が現れている（有元（1990b）を参照のこと）。また，語幹末子音の直前の母音の交替については，以上の現象に加えて，少し述べておかなければならないことある。それは，語幹末子音が /s, k, g/ であり，その直前の母音が /u/ であるときに，/u/ が [i] として現れることがある，ということである。例えば，/tuduk-/〈続く〉の完了形は [tsudzuta]〈続いた〉が最も良く使われるが，他にも，短母音形として [tʃidʒita], [tsudʒita] も適格である（但し，＊[tʃidzuta] は不適格である。また，以上三つの形の間に意味の対立はない）。これは，完了形やテ形などの /t/ で始まる接辞が続く場合だけに起こる現象ではない。以下，左列に終止・連体形，右列に否定形の例を挙げる。

| | |
|---|---|
| tsudzuʔ | tsudzukaN |
| tʃidʒiʔ | tʃidʒikaN |
| tsudʒiʔ | tsudʒikaN |
| ＊tʃidzuʔ〈続く〉 | ＊tʃidzukaN〈続かない〉 |

以上のことから分かるように，語幹末子音 /k/ の直前の母音 /u/ が[i]として現れているだけでなく，その /u/ の前にある母音 /u/ も[i]として現れることがある。つまり，語幹の部分に，

$C_1$ $V_1$ $C_2$ $V_2$ $C_3$
| | | | |
t u d u k-（Cは子音，Vは母音）

という図式を想定すると，一般的に言って，$V_1$ も $V_2$ も交替を起こすことがある。しかも，語幹末子音が /s, k, g/ のときだけであるので，$C_3$ が何であるかも条件の一つである。また，現時点では明確に分かっていないが，$C_2$ も絡んでくる（$C_2$ も自然類（natural class）を成す）ようである。さらに，上記の例から分かるように，$V_2$ に交替が起こっていて，$V_1$ に起こっていない形は適格であるが，$V_1$ に起こっていて，$V_2$ に起こっていない形は不適格である。$V_1$ にも $V_2$ にも交替が起こっている形は適格である。しかし，例外があることも否めない。詳細は明らかになっていないが，語幹内の母音交替は，上記のものだけではなく，かなり複雑な様相を呈しているようである。この現象については，別稿に譲りたい。

7) ṛ, t, n語幹動詞が同じ振る舞いをするのは，動詞のテ形の場合に見られる。このテ形における特有の現象については，有元（1989，1990a，1990b）を参照されたい。

**参照文献**

有元光彦（1988）「長崎県福江市下崎山町方言の音韻論及び形態論」九州大学大学院文学研究科修士論文（未刊）

———（1989）「五島列島二方言の/te/形における独特な分布について－長崎県福江市下崎山町・大津町－」『九大言語学研究室報告』第10号　九州大学文学部言語学研究室編　pp. 135-152

———（1990a）「五島列島四方言における「テ形」の対照－福江島下崎山町・大津町・中央町・奈留島浦郷－」『九大言語学研究室報告』第11号　九州大学文学部言語学研究室編　pp. 9-21

———（1990b）「五島列島・下崎山町方言の動詞の「テ形」における音韻現象について」『国語学』第163集　国語学会編　左 pp. 27-38

塚本明廣（1978）「長崎市方言の動詞活用表」『文学研究』第75輯　九州大学文学部編　左 pp. 39-55

# On the Verb *Onbin* Phenomenon of the *Shimo-sakiyama*-chō Dialect in the *Gotō* Islands

Mitsuhiko ARIMOTO

In the *Shimo-sakiyama*-chō dialect, there are various *onbin*-forms in the

perfective form of verbs. These are divided into two groups: the common-language form and the dialectal form. In this paper, I shall treat only the dialectal form.

The consonant-stem verbs are divided into nine groups in terms of the difference in stem-final consonants. In *w, b, m, s, k, g*-stem verbs, the "short-vowel form" appears, in which the stem-final consonant and the vowel directly before it appear as a short vowel. In *w*-stem verbs, the "long-vowel form" appears, in which the stem-final consonant and the vowel directly before it appear as a long vowel. In *g*-stem verbs, the "nasal-consonant form" appears, in which the stem-final consonant appears as a nasal consonant [n].

Moreover, there is a vowel-alternation phenomenon in the position directly before the stem-final consonant in the short-vowel forms. Specifically, in the *w, b, m*-stem verbs, when the vowel directly before the stem-final consonant is /a/ in the underlying form, this also appears as [o]. In the *s, k, g*-stem verbs, when the vowel directly before the stem-final consonant is /o/, this also appears as [e]. Therefore, *w, b, m*-stem verbs undergo *onbin* in identical ways; and so do *s, k, g*-stem verbs.

There is a relation between the short-vowel forms and the number of stem syllables. When the stem-final consonant is /w, b, m/ (bilabial consonants) or /s, k/, the vowel directly before it is /u/, and the stem is monosyllabic, the short-vowel forms are ungrammatical. The nasal-consonant forms and the number of stem syllables are also related to each other. When the stem-final consonant is /g/ and the stem is monosyllabic, the nasal-consonant forms are ungrammatical independently of the vowel directly before the stem-final consonant.

From the facts shown above, the following points are crucial, in considering the phenomenon of *onbin*:

a. whether the stem is monosyllabic or not.

b. what the stem-final consonant is.

c. what the vowel directly before the stem-final consonant is.